



Rotary, What a Wonderful World!

ロータリー、この素晴らしき世界

奉仕プロジェクト・会員増強・新会員セミナー

- 日 時 : 2007年8月19日(日)
9:30~17:00
- 会 場 : ディラン(沼田)

講師プロフィール PROFILE



国際ロータリー第2830地区 パストガバナー (RI研修リーダー)

関場 慶博
Yoshihiro Sekiba

1950年1月20日生まれ

医療法人栄現会理事長 せきばクリニック院長
医学博士、小児科専門医、日本医師会認定スポーツ医、熱帯医学専門医、躰道6段教士

青森・弘前ロータリークラブ所属
ロータリー財団大口寄付者、ロータリー財団ベネファクター、ロータリー財団遺贈友の会会員、
米山功労者マルチプル、ポール・ハリス・ソサエティー会員

●略 歴

1976年	福島県立医科大学卒業
1978年～1980年	西アフリカ・ガーナ国で小児医療専門家として医療活動
1983年	青森県藤崎町でせきばクリニックを開業
1988年	弘前ロータリークラブへ入会
2000年～2001年	国際ロータリー第2830地区ガバナー ガバナー会青少年交換委員長
2001年～2002年	クラブの発展と改善タスクフォース・ゾーンコーディネーター 国際協議会SAA
2002年～2003年	国際協議会SAA、ガバナー会青少年交換委員長
2003年～2004年	ロータリー家族タスクフォース・ゾーンコーディネーター ガバナー会青少年交換委員長、大阪国際大会 Assistant Chief SAA、 国際ロータリー第2500地区RI会長代理
2004年～2005年	ロータリー家族タスクフォース・ゾーンコーディネーター、RJW委員 ガバナー会青少年交換委員、米山記念奨学会学務・学友委員 国際協議会SAA、シカゴ国際大会 Assistant Chief SAA Chairman of Rotarian Fellowship for Population & Development Japanese section
2005年～2006年	マルメ・コペンハーゲン国際大会信任状委員、国際ロータリー第3710地区RI 会長代理、ガバナー会青少年交換委員、RJW委員、米山記念奨学会学務・ 学友委員
2006年	RI研修リーダー
2006年～2007年	RIロータリー家族支援グループ・エリアコーディネーター、RI会員組織ゾーン・ コーディネーター、米山記念奨学会学務・学友委員、 ガバナー会青少年交換委員会アドバイザー、ポリオの無い世界のための国際 奉仕賞受賞、国際ロータリー第2650地区RI会長代理、ソルトレークシティ国際 大会 Deputy SAA
2007年	RI研修リーダー
2007年～2008年	RRIMC (RI会員組織地域コーディネーター)、 ガバナー会青少年交換委員長

Rotary, What a Wonderful World!

ロータリー、この素晴らしい世界 ———●奉仕プログラム・会員増強・新会員セミナー



私は青森県で育ちましたけども、大学が福島なんですね、そして縁
がありまして、アフリカのガーナという所に28歳から30歳までおりました。
私は今57なので、もう30年近く前の話になりますが、私自身を語るため
には、この辺から語っていかないといけないので、この辺からお話をさ
せていただきたいと思います。

国際協力事業団JICAというものが当時ございました。今は同じ
JICAでも、国際協力機構と名前を変えました。現在、理事長はロータリ
ー財団親善奨学生二期生の緒方貞子さんです。

当時の国際協力事業団から派遣されまして、アフリカのガー
ナというところに女房と当時まだ10カ月の長女を連れて、赴任
しました。

なびいているのはガーナの国旗でございます。みなさんおそ
らくガーナに行かれた方はこの会場の中でいらっしゃるかい
らっしゃらないか…おそらくいらっしゃると思うんですが…
ちょうど赤道がガーナのちょっと下の方にありまして、人口は日
本の3分の2くらいですね、面積も約3分の2。1957年、アフリ
カでいちばん早く独立いたしました。当時のエンクルマ大統領、たいへん偉大な大統領でしたけれども、彼がまさにアフリ





カの独立の星となっていったということで…それからアフリカの国々が独立したということです。

みなさんから見て右の方ですね、ついこの間まで国連の事務総長を務められたアナンさんでございます。ガーナの人ですね。そして下の方にあるのがロッテガーナチョコレートですね。今もつくられていますね、昔、これがロッテに頼まれて三菱とかいろんな商社の方が、実際ガーナにカカオを現地調達して、それからつくられているものです。本当にガーナのカカオを使ってですね、チョコレートがつくられて…私がいた当時から現地でカカオを買って日本で作られているわけですけども。

そしてその隣が野口英世。みなさんご存じだと思いますが、野口英世は福島県の猪苗代で生まれ、たいへん貧乏だったということ、あるいは手に火傷を負ってたいへん苦勞しながら東京へ出てきて…ところがたいへんな努力家で、細菌学の世界的権威になっていくわけですね。そしてただ時すでに世界の細菌学はちょうど変わり目をむかえておりました。つまり、細菌学からウイルス学へと、医学は発展していったのです。病気の原因として細菌のみでなくウイルスが発見されるようになってきたのです。時代は電子顕微鏡によって、ウイルス、最近よりもっと小さな病原菌を世界の医学は見つけ出していたわけですね。それが野口の不幸の元となります。当時の黄熱病、これがアフリカあるいは南米でたいへん猛威を振っていました。その原因は、自分が発見した細菌であるという具合に発表するわけですが、ところが時はすでにウイルス学へいってしまっていたので、いやそれは違う、と。野口といえどもそれは間違っているのではないかという反論にあいまして、いや、それならば自分がアフリカに行って実際に、黄熱病で亡くなった人たちの肝臓とかですね、そういう組織から細菌を実際自分が証明してみせる、ということで彼は単身アフリカのガーナへと渡るわけです。ところが研究途中、彼は黄熱病に罹りまして亡くなった。もちろんそれは野口が間違っていたわけですけども、実際黄熱病の原因はウイルスでした。

ここに彼の胸像が…ガーナのアクラという首都なんです。そこのガーナ大学にジャパニーズガーデンとして庭がありまして、そこに野口の胸像が建っています。そしてそこには、「ドクター野口、遠き地にアジア日本より来たりて我ら国民のために命を捧げし者にここに眠る」ということで、いまだに野口英世の名前はガーナ国民全員が知っている。日本から来た野口は自分たちのために命を落としてくれたということで、たい



へん親日的な国、これがガーナです。

これはですね、1980年1月の写真ですね。私もまだ髪の毛もけっこうありましたし、髭も黒かった。…そして長女です。これはケニアに行ったときの写真なんですけども、後ろにですね、キリマンジャロがかすかに見えています。私になぜアフリカに行ったんだとよく言われます。で、いやそれはもう栄養失調の子供たちを救うために、といえど格好いいのですけども、実はそういうことではなくて、私自身、シュバイツァー博士の伝記を読んで、こうやってアフリカの現地で一生そういうところで尽くすという素晴らしい人だな、なんとなくそういう憧れがあったのと、小さい頃見たキリマンジャロの山の頂に雪があって…アフリカのああいう暑い赤道直下のところで何で雪があるんだろう、と。いつか見てみたいもんだ、そんな単純な理由から、国際協力事業団から小児科の医師はいないかと、行かないかと言われたときにすぐ応募したと、そういう単純ないきさつなんです。

このスライドはうちの子供がまだ1歳前の頃ですね、現地のベビーシッターに抱っこされているところです。

アフリカといってもたいへん広くてですね、北、エジプトのあたり、そして東はタンザニア、ケニア、私たちが住んでいた西、ガーナ、コートジボアール、リベリアとか、それから南アフリカ。全然人種が違います。顔つきも違いますし、黒さも違います。性格も全然違います。私はアフリカの人を見れば、あ、この人は東だな、この人北だな、南だなと、だいたい区別がつきます。そのようにアフリカといってもですね、我々はよくアフリカって一言でいってしまいますが、そうではないですね。アフリカあるいは我々よく間違えるのは、アメリカ人は、日本人は、韓国人は、という言い方…そうしてしまうと間違えることが多いですね。じゃなくて、日本人の関場慶博は、あるいはアフリカのJ・J・〇〇さんはこう考えている、という具合に言ったほうがいいですね。そうでないとどこかで間違えてしまうことがあります。





私は栄養失調の方の病院へ赴任しました。この写真はたいへん悲惨な写真であります。アフリカの現在の状況とあまり変わっていませんけども、ひとつ、水の問題があります。アフリカでいったい何がいちばん困ったかといいますと、やはりまずは水。水道管はあるんですけども、なかなか水が出てこないんですね。蛇口をひねっても水が出ない。一週間、そのまま断水してしまいました。一週間水を飲まないともちろん人間は生きていけないんですけども、幸いなことにエアコンがありました、クーラーが。そのクーラーから水がほとほと滴り落ちるんですね。それをバケツ一杯集めますと、一日バケツ4分の1程度は集まります。エアコンは3台持っていましたので、それを集めるとだいたいバケツ一杯ほどの水が確保できます。飲用水にしたり、体を拭いたりということで、一週間なんとか生き延びることができました。有り難いことに、断水と停電が同時に一週間なかったですね。もしそれが来たら、おそらく生きて帰れなかったかあるいは途中でギブアップして帰ってきたと思うんですけども、それがなかったおかげで、私は2年間過ごすことができました。

ものすごくアフリカで驚いたことは、私自身が小児科の教科書で勉強した昔々の病気、日本にいたときは見たこともない病気ですね、そういった病気がごろごろとアフリカにはあり…たとえばコレラだとかチフスだとか日本では見たこともなかったんですけども、アフリカに行きますとそういう病気に子供たちが次々と感染しては病院に運ばれてきて命を落としていく。いや、病気だけではなくて、栄養失調ですね。食べるものがなくて。あるいは食べるものはあるんだけど、字が読めないために…。アフリカのガーナでは魚を食べるとい習慣がないんですね。たんぱく質は肉から摂るんですけども、動物の。動物も痩せてますので栄養失調で本当に悲惨なものです。そのたんぱく質が摂れなくなると、炭水化物ですね…米とか芋とかだけを食べるんです。そうしますと体にタンパク質が不足して、低たんぱく性の栄養失調になります。クワシオルコルと言いますが、つまりカロリーは摂ってるんだけど、たんぱく質が摂れないので、低栄養でむくんで、心臓なり腎臓に負担がかかって死んでいく。そういう栄養失調なんです。だから栄養失調といったときに、絶対に食べるものがないということもあるんですけども、それ以外に教育がない、つまり魚食べれば良いんですよとか、あるいは大豆を食べるとタンパク質を摂れますよ、ということが教育としてお母さん方に全然伝わってない。そのために栄養失調になって、自分たちの子供が死



んでいくわけです。そこで、やはり識字率という問題も出てくるわけです。国際ロータリーの会長が…言っている水の問題、あるいは保険の問題、識字率の問題というのは、私今から考えてみますと、このようにたいへん人の命に直結した問題であると、そういうことで私たち日本人は、日本にいれば…ガソリンより高い水を私たちは平気で買って飲んでますよね、水道の水はまずいとか。まずくてもあればいいんですけどね。飲料水が日本人なら全然そういう感じがしませんよね。水は普通にある…。あるいは保健の問題にしても、病気にしても、日本では確かに最近一人一人の病院に払う額がだんだん高くなってますけど、それでも薬はありますし、治療もできる。いつでもどこでも行ける。ところがその薬がない、それがアフリカの現状でありましたし、今も状況はそんなに変わりはありません。

この子は3歳の女の子でしたけども、運ばれてきた状態の頃で意識もなくて、そして命を落としていった。

もうひとつはポリオですね。これは成人の女性なんですけども、アフリカでは私がいたところにもこのようにポリオに感染して亡くなっていく子供がたくさんいました。また亡くならないとしても、このように感染して足が萎え筋肉が萎縮して歩けなくなってしまう、足が全然利かなくて上半身だけで這って歩く、そんな子供たちあるいは大人たちをたくさん見ました。ある日街中で、通りを這って歩いている人が2~3人いたもんですから「あれ、どうしたんですかね、あの人たちは」と聞いたんです。そしたら私の同僚が「ドクター、あなたは知らないのか。彼らはポリオだ」初めて私はポリオという病気を見ました。教科書では知っていました。日本では赤ちゃんのうちにポリオのワクチンを皆に投与します。だから日本の子供たちはポリオに感染しないですし、死ぬこともなければ、こういう後遺症に苦しむこともない。だけでもアフリカではポリオに感染して死んでいく赤ちゃんたち、あるいは命が助かっててもこのように後遺症に苦しむ人たちがいる。

みなさんゴルフをやられるでしょうが、アフリカに私のいたガーナにもゴルフ場が国で唯一ひとつだけあるんですね、アチモタ・ゴルフ・クラブ。私は下手なんですけども、アフリカにいたとき、月に2回ぐらいそのゴルフ場に出かけたものでした。日本のゴルフ場、先進国の普通のゴルフ場というのはフェアウェイも奇麗で。私は日本にいたときはゴルフやらなかったんですけど、アフリカ行って初めてやったもんですから、アフリカ





のゴルフ場のフェアウェイというのは普通の土です。普通の道路みたいな。日本のゴルフコースのグリーンは、そこはブラウンといいまして、土を掘ってその中に穴がぽこっと空いてる。あとブッシュ、藪が本当にブッシュでありまして背丈が高くて。そこには…毒蛇とかサソリとかがいる。だからボールをブッシュに打ち込むと決して取りに行ってもはいけない。先ほど言ったフェアウェイですけど、土の上ですから、しょっちゅうティーアップして打っていくという形です。ですから日本に来たら緑がたいへんあるのでびっくりしました。これもゴルフ場なんだって。そんなアフリカでゴルフをして、そのためにバンカーショットだけは得意だと自分では思っているんですけどね。キャディーさんなんですが、日本ですときれいな女性が…ちゃんとやってくれますよね。アフリカのゴルフ場のキャディーさんというのは、男の子なんですね。小学生あるいは中学生の男の子がやってくれる。学校行ってないんですね。なぜか。私たちにキャディーとしてつきますと、50円から100円もらえる。それくらいもらえると一家、彼らの家族が2～3日は暮らしていける。そのために、彼は学校に行かないでゴルフ場に来ている。結局、学校の教育を受けることができないという現状です。

私はクワシ君という僕にいつもついてくれた12歳の男の子と仲良くなりました。彼が「ドクター、おまえはいい奴だから、今度うちに連れてきて父さん母さんに紹介する」というわけなんです。僕もこのこついでに行きました。彼の家というのは、屋根はトタン板がひょっと載ってるだけの、そんなお家でした。今写真が出てますが、もちろん水道もなければ電気もない。その家の中、奥の方にちょっと光る眼を見たわけですね。最初は犬か猫かと思いました。だんだん暗闇に慣れてきましたら、それが人間であることが分かりました。彼は「彼女は叔母さんだ」と。ポリオに感染して歩けなくなったので、ずっとああやって今まで今も部屋の中で一人で暮らしているんだと。

ポリオの患者さんを自分は初めて見とのが、その時でした。国際ローターリーが1985年にポリオをこの世から無くそうということに乗り出して、1988年にWHOが本格的にポリオ撲滅へと向かって、今、その当時の年間35万人の99%が撲滅されてきたのはご存じのことです。私はこのときまだ30歳、ロータリアンではありませんでした。帰国後、38歳になってローターリーに入ったときに、再びポリオと出会うことになりました。私は38歳で弘前ローターリークラブに入会させていただきました。誘って



くれたのは、父親の葬儀を司ってくださったお坊さんだったんですね。そのお坊さんが弘前ローターリークラブのメンバーで、「関場さん、ローターリー入りませんか」と。そのときローターリーの口の字も何も分からなくて、ちょうど親父も亡くなってどうしようかなと思っていたものですから、新しい出会いがあるならいいなと思い入会しました。そのとき言われたのが、「とにかく一週間に1回みんな集まって昼飯食べるんだよ」。入会して、なんというんでしょうか、歳もバラバラということもありましたけども、だんだんやはり面白くなって欠席がちになりました。3ヶ月間ぐらいはもう完全に休んでました。ルールからすると私は退会処分です。すると、私は今ここに立ってるはずはないんですが、うちの弘前ローターリー・クラブの方々は私を首にはしなかったんですね。そしてとあるとき、3カ月も欠席を続けていたときに、Sさんという方が、彼も私と同じ開業医なんですけど、僕よりも20歳も上の方でしたけども、ちょうど私の診療所近くまで用事があって来たから、今日はちょうど金曜日の例会日だから、これから例会と一緒に行きましょうと誘いに来てくれた。私は、本当は行くつもりは全然なかったんですが、わざわざ来てくれたし、大先輩ですしむげに断るわけにいかないので「はい、分かりました」ということで一緒に例会場に行きました。

そこで遅刻して行ったわけですね、そして帰ってきて、やっぱりつまらないな、もうやめよう。そしたら、佐藤さんが翌週もまたお出でになって、傍まで来たから一緒に例会へ行こう。3週間も続くと、いくら鈍感な私でも分かりました。そのときに、あるとき電話がありまして、それはクラブの方でした。「関場さん、佐藤さんがあなたが全然来なくなったので、たいへん心配されておりましたよ。『あいつはやめんじゃないかな、いうことで私が今回から誘いに行ってきます』』ということをやっていたのですよ。佐藤さんは無遅刻無欠席の方だったんですが、あなたを誘いに行くことによって、初めての遅刻をしたんですよ。あなたを思いやるような人がいるということを忘れなさんなよ」という電話をいただきました。私はそのとき初めて、ローターリーのなんたるかが少しわかってきたような気がしたんですね。私はそれ以来、その佐藤さんのために、例会へ出席しようと思いました。だからつまらないとか楽しいとか以前の問題ですね。ローターリーの例会というのは、楽しいから行く、つまらないから行かない、やめるではなくて、例会というのはやっぱり「行く」んだと。まずそこからすべてが始まるんだということがようやく分かったんですね。そして、例会



を楽しくするのもつまらなくするのも自分自身の責任だと。自分の思うことひとつだと。たとえば佐藤さんに会いたい、それひとつがあれば1時間の例会でもたいへん楽しくなります。そしてそれが、フェロシップだということに、最近ようやく気がついたんです。

親睦と奉仕、というぐあいに言われますけども、僕はあえてフェロシップとサービスという言葉をごだわって使っています。フェロシップは仲間を大切に思う気持ちですね。弘前ロータリー・クラブのメンバーのみならず、私は全世界120万のロータリアンというのはみんな仲間だと思ってますから。仲間。仲間ということを大事にしたい。

それだけではないですね、それだけならロータリーというのは100年の試練を超えては21世紀には入れなかったと思います。やはりサービス。人の何かお役に立てることの喜びですね。ただ一度限りの自分の人生において、自分のために生きたんでは、何か死ぬときに後悔するんじゃないかなと思うし、何か人の役に立てる、あるいは社会の役に立てる。それが自分の達成感として喜びとして感動として、また自分のこれからの生きていくエネルギーになっていく、それがロータリーのサービスだと思うんですね。そしてそれがあからこそ、私はロータリーというものが1905年から100年以上続いて、さらに今21世紀に入っの、私たちロータリアンとしてこのように集まりながら、お互いに胸襟を開きながら話をして、励ましあい、エネルギーをもらいあって、そしてそれぞれ職場に帰って、また自分の職業に精を出していくということがあるだろうと。

私はロータリーの歴史とか哲学とかは勉強するのは好きではありませんが、でもどうでもいいことなんですね。それよりも、やはり今ここ、この場ですね、このようにみなさんとお会いして、やっぱり、ああ会えて良かったなど。今日、小磯さんも来てくれているわけですけども、小磯さんとはお互いに青少年交換委員長だった時以来、ずっともう15年間おつき合いただけてますけども、小磯さんが僕が来てるんで今アメリカから帰ってきたばかりだというのに、わざわざ僕に会いに来てくれたということで、もう本当に嬉しいです。こういったつき合いも、ロータリーならではですね。

今から7年前ですが、こんど弘前クラブからガバナーを出さなくちゃいけないということになりまして、たまたまですね、先ほど言いましたSさ

んが会長でした。弘前クラブでは私より先輩方もたくさんいましたし、順番からいくと私なんかガバナーに指名されるはずもなかったのです。しかし、Sさんが、「私は関場を推薦する。少し変わっているがああいう人間にガバナーをやってもらった方が地区の活性化につながる」と。そのようにして、私がガバナーになることになりました。なりましたといっても、私はまだ開業して時間もそんなに経ってませんでしたし、たくさんの借金を抱えておりました。まして本当に医師一人だけの小さな診療所ですし、自分がガバナーになり公式訪問で診療所を留守にしまうと、診療所はつぶれてしまいます。ということでお断りしたんですけども。Sさんが、「まあ、そう言うなよ。人間はね、必要とされる時は受けた方がいいよ」なんて言われて。あと、うちの女房が「そんなにみなさんから望まれてるなら一年間病気になったつもりで、入院したつもりで受けたら。本当の病気になったら仕事をしたくたってできないんだから。もっともロータリーもあなたの病気みたいなものかな」。そういう女房でありまして、その女房に背中をポンと押されました。そして、ガバナーを引き受けるようなハメになったんでございます。

その一年間はいろいろ大変だったんですけども、でもそれを補って余りあるものを得ることができました。こうやってみなさんとお会いできること、多くの人との出会い、そしてロータリーを通して得られる感動というのは、とてもとてもお金を出しても買えるものではありません。もう比べ物にならないたくさんのお贈り物をいただいたとは思ってます。

そんな中、私がガバナーになるんであれば、どうしてもやりたいことというのがありました。そのひとつは、ここにネパールのアネコット村の写真が出ていますが、これから未来を担う若い人たちを、こういうネパールの貧しい村につれて行きたかった。電気も水道もない、けれども人間的に豊かな暮らしをしている人たち。私はここにガバナーになる前に3回ほど訪れているんですけども、そこでもらった自分なりの感動ですね、そういうものを若い人たちに絶対伝えたいなと思い、インター・アクト9名を連れて行きました。

このスライドでは、女性が7名、男性が2名。ど真ん中に写ってる白いジャンパーを着ている子がカオリっていうんですけども、彼女は高校2年生でした。不登校で、高校に行っていませんでした。ところがインター・アクトだけは続けていたんですね。私がガバナー・エレクトの時にインター・アクト年次大会において、来年はインター・アクトの翼として韓国や

ロータリーを支える 時空を超える原理

Fellowship

仲間を大切に思う気持ち

Service

お役に立てることの喜び





台湾へは行きません。ネパールに行きます。で、僕らの行くところは、本当の現地の村だから電気も水道もないよ、食べるものも現地の方と一緒にですよ、寝るところも寝袋持って現地の方のおうちの土間に泊めてもらいます。それでも行きたいと思うなら応募してくれと言ったんですね、はたして何名の応募者がでるかと思ってましたら、なんと9名おりました。そして7名が女性で、その中の一人が真ん中のカオリでした。

彼女は不登校だったと言いましたが、非常に真面目な女の子ですね、人生のこととか、現在の日本の状況だとか、あるいは高校の状況だとかに失望していて、学校行っても意味無いのでは。そのカオリがネパールに是非行きたいということで、一緒に連れて行きました。

カトマンズ空港に降り立ちました。そしたら現地の何十名という子供たちが、彼女の周りにわっと取り囲むわけですね。つまり、彼女が持っているスーツケースを自分が持っていき、車で運んでやるから、そのために100円くれと、こういうわけですね。わっともう群がってきてそして異様な匂いがしていますし、たいへん汚いわけです。彼女はそこでびっくりしちゃいまして、その瞬間泣き出しまして、「関場先生、もう日本に帰りたい」と彼女は言っていた。その日はカトマンズのホテルに泊まりましたので、彼女と二人で話をし、「そうか、わかった。だけれども私たちが今回来た目的は、ここじゃなくて明日行くアネコット村の小学校だから。そこであなたは日本の文化を教えると、子供たちに折鶴を教えるということを楽しみにしてきたんだから、そこまでやろう。それでももう帰りたいというのであれば、いいよ、次の飛行機で帰してあげるから」という約束をしました。



次の日、アネコット村カリカ小学校。もちろん電気もないので、昼なお暗い教室、そこに子供たちがいるわけです。そこで折鶴を教える。日本の子供たちに教えるのもたいへんなのに、ましてや言葉が通じない、あるいは折り紙をもったことがない、こんな小さなもの折ったこともない子供たち、50人くらいの子供たちに教えるなんて大変なことなんですね。一人一人こうやって教えていかなきゃいけない。朝9時から始まって、11時、12時、お昼飯時なんだけれどもまだ終わらない、1時、2時、3時。もう学校が終わる、そのときようやく終わりました。全員が折鶴とは言えような不器用な折鶴でしたけれども、それを持って彼女の周りにばーっと集まってきた。そしたら、彼女はもう、昨日カトマンズ空港で同じような子供たちに集まられて泣いていたカオリがですね、その教室の子供たちを自

分の手で抱きしめて「よくやった、よくやった」といって、涙があふれて止まらないくらい感激を彼女はして。その後、私のところへ来て「関場先生、よかった。生きてきてこんなに感激したのは初めて。あの子供たちの一人一人の笑顔を見たらとても涙が出てきてしょうがなかった」こういうわけですね。その後、彼女は現地の人のところへ泊めていただく。その中で、次の日の朝ですね、朝早く子供たちは起き出しまして、水汲みをしているわけです。ネパールは段々畑になってまして、なぜかという、平地はあるんですけどもマラリアが怖いのでだんだん高地の方に畑をつくりだしました。水汲みが大変なわけです。段々畑の一番下にある井戸から水を汲んで上がらなくちゃいけない。それを小学生がしているわけです。そういうことを見てた彼女が「ああ、私はこんな手伝いを日本にいたとき、自分の母親にしたことがあったらどうか」ということを彼女は深く考えたそうです。そして、親と子供たちが生きていくために本当に愛情を持って語り合う、こういったことが自分には欠けていたなど。彼女は日本に帰ってきてからすぐお母さんに「ありがとう」と。そしたらお母さんの方も「私の方こそ」ということで、そこから親との会話が始まり、彼女はまた母校へ戻り、そして「関場先生、私には人生の目標が見つかりました」といってくれました。彼女は将来、国連で働きたい。ネパールそして多くの発展途上国の子供たちのために自分のことをしていきたい、これが自分の人生の目標だ、いう具合にはっきりと見据えたわけでありました。

彼女は高校終え上海大学に行っていてですね、中国語を勉強してたんです。そしてまた戻ってきて成田空港に勤めて、少しお金を貯めて、もう一回大学に行くんだということで、今年の4月からまた東京の大学に国際関係学を勉強するために入って、あと3年したら国連に応募してということで、いきいきとそういうことを語ってくれました。

私はロータリーのマジックだと思うんですね。一人の不登校の子供の不登校を治した、だけではなくて、その一人の高校生に対して、生きる目標、自分の人生の目標というものをロータリーのプログラムを通して与えることができたということは、私にとって本当に大きな、大きな経験でした。

私たちはほとんどの場合とインターアクト・クラブやロータクト・クラブにやや無関心な傾向がありますが、どうかもう一回見つめなおしていただきたいと思います。そういう一人一人の子供が大きな可能性を秘めてるん



だ、いう認識に立って、一人一人の子供を可愛がっていただきたい。その子供たちがカオリと同じように、いつの日か必ず、眼が開いてですね、彼女なりの人生の目標を持つようになるのです。

私はその後、ネパールに何回か行きましたけども、このスライドはポリオワクチンの投与に行ったときのものです。隣にいるのはネパールのボランティアの方ですね。この方は、普通の家庭の主婦の方です。こういった方がネパールのポリオワクチン一斉投与日にボランティアとして参加してくれています。まあ実際、このように投与していくわけですけども、この2滴でこの子が一生ポリオにかかることはないわけです。後ろに見えているのはヒマラヤです。行った方はおわかりですが、首都のカトマンズは盆地ですので公害がひどいですが、少し郊外にでると本当にキレイなヒマラヤ望む美しい国ですね。

そしてもうひとつ私がガバナーになってやりたかったことは、インドでポリオワクチンの投与をしたい、ということでした。先ほどアフリカでの生活の話をしましたけども、そこで見たポリオの悲惨さというものは、日本に帰ってきて日本の忙しさの中でわすれかけていたのです。その忘れかけていたポリオというものを思い出してくれたのはロータリーでした。

2001年1月18日、私たちは雪の青森空港から暑いニューデリーへ飛行機で向かいました。ロータリアン、ローターアクターそして私の家内も一緒に、総勢25名でした。このように、先ほども言いましたが、ポリオワクチンというのは、先進国では今、注射になっています、不活化ワクチンといってより副作用の少ない形になっています。なぜ経口ワクチンを使うかという、効果が確実であるということ、安いということですね。あと、注射ではありませんので、誰でも投与できると。ということでこっちの方のワクチンをいまだに使っているわけですけども、今言ったように先進国では、すでに注射の方の不活化ワクチンへと向かっています。日本も近い将来そうなるでしょう。こういうNIDというワクチンの一斉投与を行います。これは一斉投与しないと意味がないので、一日のうちに、この日は1月21日でしたけども、1億4500万人の子供に対して一斉投与するという、日本では考えられない気が遠くなるような人数へワクチン投与を行いました。

私たちが行ったのはデリーのスラム街なんですね、戸籍も何もありませんので、日本でしたらたとえば1月21日の朝9時からナントカ公民館で



ニューデリー、インドへ



ワクチン投与があるからみなさん来なさい、といえ来ますよね。ところがインドで、特にスラム街であれば、そういったアナウンスする方法もなければ、戸籍もないのでお知らせする手紙を出すわけにもいきません。じゃあどうするかといいますと、スラム街のワクチンを投与するためのブースですね、場所を300Mごとくらいにつくるんです。そのブースに我々ボランティアが4~5名いまして、そして子供たち、赤ちゃんたちを母親と共に連れてきて、そこでワクチンを投与すると。いうことをするわけです。そのようにして、最初我々日本人が行っても、なかなか子供たち怖がって寄ってこなかったですね。うちのかみさんが紙風船を持ってきてポンポンと突き出したら、やはり世界の子供は共通で楽しそうで近寄ってきた。近寄ってきたところで、そのままブースに連れてきてワクチンを飲ませたと。すっかり終わる頃には仲良くなって、またいらっしゃいと言われた。

真ん中の男の子が太鼓を叩いています。なんで太鼓かという、お母さん方も自分の子供にわけ分からない薬を飲ませるなんか恐怖心があるわけです。これがいったい何のためか分からないわけですよ、ポリオといたって。そこで、この太鼓を叩いてドンドン鳴りますとみなさん集まって出てきます家からね、お母さん方が出てきたとき。その出てきたところを現地のロータリアンがうまく言って、ブースへと連れて行くわけです。連れてきて半ば強制的に飲ませると、ということですね。そのために鳴り物が必要なわけです。真ん中の男の子は実は右足がちよっと不自由なんです。彼自身も小さい頃ポリオにかかったのです。彼は毎年ボランティアで太鼓を叩き、彼は朝7時くらいから夕暮れ時まで休むことなく太鼓を鳴らしていました。彼は私に対して、自分がワクチンを飲めなかったばかりに今足が不自由である。ということでありました。だから、自分たちの弟妹たちにはワクチンを飲んでもらって、病気にならないようにしてもらいたいなど。で、あなたたちみたいに日本からわざわざ来てくれて、自分の弟妹たちの命を救ってくれたことをたいへん感謝していると、そういうことを言われましてね、私も彼の手を握り締めながら涙が出て止まりませんでした。そういうボランティアの人たちにこのワクチン投与活動は支えられております。だから私たち外国人も来て、最初は正直言うと半分は物見遊山というか見学に来た気分もあったのですが、現地のロータリアンから言われたのは、「みなさん一人一人が戦力なんだから頼むよ、ちゃんと働いてくれよ」ということでした。1億4500万人





の子供に200万人のボランティアでやる。ブース内には3人から4人しかいないわけですね。交替交替にインドのロータリアンも日本のロータリアンもみんな必死でやっていました。

いっしょに行かれた方にFさんという建設会社の社長さんがいらっしゃいます。ロータリーは職業奉仕が一番大事なんだ。ロータリーは個人奉仕。だからポリオ・プラスなどという団体奉仕はきらいだ。財団へなんて寄付する気もない、そういう方なんです。

2001年1月18日、雪の青森空港、そこにFさんがですね、会社に行くようなスタイルでとことこ来たんです。私は見送りにきてくれたのかなと思ひまして、Fさんどうもありがとう、じゃあ行ってくるねと言ったら「いやオレも一緒に行く」と、私も忙しかったので参加者の名簿をよく見てなかったんですね。びっくりしましたけれども、嬉しかったです。彼も一緒にニューデリーに行きまして、私と家内とFさんとはチームになって子供たちにワクチンを投与することになりました。彼としては当たり前ですけども自分でワクチンを投与するなんて思ってもいなかったと。私がやって、うちの家内がやって、次がFさんの番になりました。さあFさんやってと言ったら、オレもやるのかよと言いながら、私が赤ちゃんの頭を抱えてそして彼がポンとワクチンが入ったスポイトを押せばいいわけですね。ところがなかなかワクチンが赤ちゃんの口に落ちてこないんですよ。あれっと思って、やり方が分からないはずがないしなと思って、頭を押さえながらふと彼の顔を見たら、なんと彼が涙をぼろぼろ流しているんですよ。それでもワクチンの2滴を赤ちゃんの口のなかへ落しました。関場さん、オレこの子1人でいいや、ちょっと休み、休憩といって廊下の方へと行きました。あとで彼は私に「関場さん、ワクチンをね、この子にやろうと思ったら、ちょうど赤ちゃんの眼があった。オレがワクチンをこの子に与えることで、この子が命が助かる、そして後遺症で足が萎えて障害があることもなくなるんだなと思ったら、もう感動してしまって、涙が出て止まらなかった」と。Fさんは、「私はロータリーというものは職業を一生懸命やることだと思ってきたけども、初めて今、国際ロータリーとして取り組んでいるポリオというものの意味が分かったような気がする。財団というものもなんだか少しは分かったかな」ということで彼は日本に帰ってきてから、「関場さん、ロータリー財団の寄附というものを少ししたいんだけど、どうすればいいんだ」と言ってくれるようになって、Fさん変わったなあって思いましたね。そしてその後、実は困ったことは「関場さん、来年も行きますよ



う]こういうわけです。

そのようにロータリーのすごさというのは、さっきのように若者の人生の目標を与えてくれた、生き方を変えてくれた。同じように55歳になって、もう自分の人生は変わらないと、いくらいの人たちの人生、生き方を変えてしまうそういう魔力を持っているんだなああと本当にそのとき思いました。私はそのFさんの生き方をずっと見させていただきましたけども、実はその後また話がございまして、彼は若いときに〇〇〇ホームというところに勤めていて、その後彼は自分で会社を興して年商30~40億という企業にまで成長させて、従業員も200人を使う会社にまでいったんです。インドに行ったところは絶好調なんですね。ところがその後、例のバブルが弾けていき、彼の会社も苦しくなってきた。ついに倒産しました。もちろんクラブもやめました。しばらく音信不通だったのですが、今年の1月にFさんから一枚の招待状が来ました。そこには今度、また別の会社を興しました、つきましてはその出発のためのささやかなパーティーをやるので是非出席して下さいという案内状でした。私は女房と二人で喜んで参加しましたが、彼が絶頂期の頃は弘前のいちばんでかいホテルを貸しきって、毎年、盛大に創立記念パーティーをやってたもんです。ところがその1月の出社式はわずか30名ほどが、身内だけが集まった、従業員も200人もいた会社だったんですけど、彼をまじえてわずか5人でした。その中で、彼はもう1回会社をやることにしました。倒産しまして、たいへんみなさんの多くに迷惑をかけて、一時は自殺も考えた。そして自分も年商何十億とやってきて、また今さらという気もあるんだけど、でも、もう1回だけ自分自身にチャンスを与えてやりたいと思う。いうことを話しました。その日彼はなぜもう1回やろうかと思ったという話になったときに、彼はこう言いました。実は今日この場にきている関場さんと一緒に、2001年にインドに行った。そのときに自分はある一人の女の赤ちゃんにポリオのワクチンを投与してきた。その子も元気でもう6歳くらいになっているはずだ。で、お母さんから、あまは日本のロータリアンが来てワクチンをもらったおかげでこうやって生きているんだよといっていると思う。その投与した自分が、会社が倒産し人に迷惑かけたまま、自分の人生終わってしまったら、じゃあその女の子はどう思うだろうか。いうことを彼は言いました。オレはその女の子のためにもう1回自分自身に鞭打って。本当は恥ずかしい話です。みなさんに迷惑かけて今さら。でも私はそのインドの女の子のためにもう1回やろうと思った。



だからもう1回チャンスを下さいと、彼は涙ながらに話しました。彼の会社が始まって、まだ半年も経ちませんが、私もちょっとご無沙汰でお会いしてないで何とも言えませんけども、私はおそらくそんなに昔ほどの年商何十億とはいかないと思うけれども、彼はそのインドの女の子のために一生懸命に、かつてのあの大社長の彼がですね、てんやわんやしながらどんな小さな仕事でも引き受けながらやっていると聞いています。

Enjoy Rotary! ●



これはさっきと同じ写真なんですけども、右から2人目の方がマリーさんといってニューヨーク州のガバナーさんですね。私はこのとき彼女と初めて会ったのですが、その後手紙を頂いて、2001年6月に彼女の地区で地区大会やるので、ついでに会場、おまえ来てしゃべれと。インドのポリオワクチンのこと、あるいはあなたがアフリカに行って経験したことを、30分基調講演してくれと言われてまして、私も英語もそんなにうまくわでもなく困りましたが、これも何かの縁だな2001年6月に彼女の地区大会へ行ってきました。ところが、彼女の地区大会が開催されるわずか2週間前に旦那さんが心筋梗塞で亡くなっていたんですね。私は知らなかったんですけども、彼女は気丈に地区大会というものを乗り切らして、そして最後の閉会式、そのときにちょうど地区幹事の方がすくっと立ち上がりまして、みなさん実はマリー・ガバナーの旦那さんは、ジョンさんは2週間前に亡くなったんだと。ところがこれを会員のみなさんに知らせないでくれと。なぜなら、この1年に1回の地区大会のために、みんなで楽しいこといろいろ考えてくれて一生懸命楽しく楽しくやろうというときに、もし自分の亭主が死んだなんて話をしたら自分に気を遣って、せっかくの地区大会が台無しになるだろう。ということで彼女は地区幹事の方に黙っていてくれと言ったそうです。ところが地区幹事の方は最後、やはり黙っているわけにはいかない、ということで、彼はさあジョンさんのためにみんなで祈ろうということで、みんなで彼のために祈りました。それまで堪えていたマリーさんは本当にそこで号泣しました。その中で閉会点鐘ということになったわけですが、私はそのときほど美しい鐘の音を聞いたことはありませんでしたし、おそらくこれからもないと思います。このアメリカの女性ガバナーのマリーさんとは、年に1回必ず国際大会でお会いしていますけども、素晴らしい人がいらっしやるもんだなあと思うように思いましたね。日本人は大和魂といい



ますけども、アメリカ人もね、フロンティアスピリットというものが生きているなと思いました。ロータリアンになる人はみんな素晴らしいなと思いました。そういったことを自分が経験できたのはロータリーのおかげだなと思っています。

私と女房は、それ以来というか毎年国際大会、国際協議会でSAやらせていただいています。これはブリスベンの大会の時ですね、これはシカゴの国際大会でSAAの仕事が終わって打ち上げパーティーでみんなでわいわいとやっているところです。これはこないだのソルトレイクシティの国際大会ですね。

みなさんも国際大会出られていると思うんですけども、国際大会に出ますとね、またいろんな人とお会いできますし、またロータリーの楽しさというものを味わうことがあります。そしてそこではいろんな国からのロータリアンと会えますし、また新しい友情が芽生えます。それが国際大会の楽しさだと思います。来年はロサンゼルスですので是非参加されたらよろしいと思います。

後に続く人々、未来を託す人々と書きましたけれども、私たちロータリーのプログラムはいろんなプログラムがありますが、今ポリオの話もさせていただきましたけれども、やはりなんといっても若い人たちに対する素晴らしいプログラムがありますね。なぜ私たちはそういうプログラムを持っているかというと、もう私たちはどんなに頑張ったってあと40年50年も生きられるわけではありません。そしてこの地球、あるいは人類というものを託していくのは若い人たちですね。

彼はスティーブ・デービス君といましてカナダからの交換学生でした。2005年のシカゴ大会のときに、私は帰りにカナダのバンクーバーにいておりました。彼は今から10年ほど前に、青少年交換学生として青森県にやってきた子供です。ちょうど私が青少年交換委員長でした。彼は小さい頃にお母さんをガンで亡くし、そして後でお父さんが再婚されて、彼としてはお父さんを許すことができなくて、あんなに愛してお母さんが亡くなって1年も経たないうちにまた新しいお奥さんをもらう父親が許せなくて、半ば逃げるように青森にやってきた子供です。私はある日彼から、亡くなったお母さんの手紙をたくさんダンボールに1箱くれました。「関場さん、これ読んで下さい。私の気持ちが分かってもらえるはずですよ」ということで読みました。その中に死んでいく母親が我が子ス



● あとに続く人々 未来を託す人々



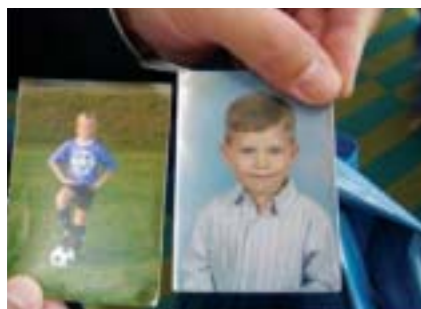


では仲良くやっているんですね。なんか私としては非常に複雑な気持ちになりました。

そんな中、このように現地採用型ということで、応募者が100名近くいたんですね、そのうちから2名だけ選びまして、その二人がこの8月日本へやってきました。一人は東京、一人は大阪の方へと来ています。私はこういう米山奨学会だったら年間10万は寄附したいと思っています。みなさんも是非、米山奨学会のことをですね、少しでも知っていただければありがたいと思います。このような新しいプログラムも始まっていると。私たちの未来を託する若者たちに奨学金を与えて思う存分勉強、研究してもらい、そしてその人たちがそれぞれ国に帰って、その国のために、そしてベトナムと日本の架け橋になってくれると、これは間違いないですね。と私は本当に、実際自分が現地に行って自分で選んで連れてきた人たちですから間違いないと思っています。

このスライドではみんな一生懸命勉強していますね、ここは図書館じゃないんですよ、廊下に机があってそこで勉強しているんですね。そして何を勉強しているのかとよく見たら、なんと日本語なんですね。あれっと思って声かけました。そうしたら彼女は「私は日本に行きたいんだ」と。そして米山記念奨学会のこともこの間知りました。来年は応募しようと思っています。ということで一生懸命日本語を勉強していました。こういう人たちに私たちのロータリーのプログラムというのは夢と希望を与えるんだなと思い、ああ現地採用型の奨学金ができて良かったなと思いつつ、ベトナムを後にいたしました。

こないだのソルトレイクシティ大会で私がSAAやっていたら、私の担当はメイン・ゲートだったのですが、ゲートから皆さんが入ってきますね、どこが登録会場だとか、どこがトイレだとか、どこが本会議場だとか、それを案内するのが私の役目なんです。あるアメリカ人がいきなり僕に写真を見せながら、「あなたは、関場さんだよ」「はい」「この子、覚えている?」というわけですよ。「いやー、覚えてないなあ」「この子の命をあなたが救ってくれたんだよ」いうわけです。えっと思って、お父さんをよく見ましたら、ああそうかと。私が2002年に、ガバナー終わって次の年の国際協議会、ガバナー・エレクトが世界中から530人集まってやる国際協議会がありますが、そこでみなさん地獄の特訓を受けてきて、横山ガバナーなんかもそうですけども、そこでロータリーに洗脳されて帰ってくるわけですね。それまで結構RIに批判的だったのに、いきなり



ロータリーは素晴らしいなんて言い出すんですね……冗談ですけども。アメリカ人の彼はその時のガバナー・エレクトの一人でした。彼が子供を連れて、当時赤ちゃんだったんですね、まだ5~6か月、奥さんと参加していました。SAAには、メディカルSAA、つまりお医者さんの人いるんですけども、小児科ではないんです。5ヶ月の赤ちゃんが熱を出してるといことで私が呼ばれました。「おまえ、小児科医だから診てあげて」「はい分かりました」といことで診させてもらったら、単なる風邪ではなくて、肺炎を起こしていましたから、これはすぐ入院させた方がいいですねといことで、私が病院に付き添って入院させたという経緯があったんですね。僕なんかもう5年前の話ですから、忘れていました。ところが彼が、私はいつもこの子にあなたの写真を見せて、この日本人のロータリアンがおまえの命を救ったんだと言ってあると、だからもう少し大きくなったら日本に会いに行かせるから、こう言ってくれたわけですね。そして私は、彼の写真をもらってきましたけども、私はこれで、ソルトレイクシティに来てよかったなと思いましたね。そしてロータリーやっていたよかったなと思いました。私みたいな雪の深い片田舎でいる一開業医がこのように皆さとお会いできるし、そして人の命まで助けた、そのように感謝されることは本当にロータリーでなければあり得なかった事と思いますね。今年のウィルキンソンRI会長もおっしゃっています、これだけ素晴らしい仕事ができるのは、平凡な私たちが非凡なことができるのは、人に希望を与え、勇気を与えることができるというのは、ロータリアンだからであると。

メジャーリーグでは松井が頑張っていますね。私はいつも彼に勇気づけられています。松井はみなさんご存知のように、ジャイアンツの4番という地位を自ら捨てて、アメリカに渡って、メジャーたいへんですよ、行った年は何も打てなくて、ゴロキングなんて言われちゃって、内野ゴロばかりで。でも今は見事にヤンキースの一員として、チームの牽引車になっています。私は彼から一人の男の夢、そして感動をもらっているような気がします。立場はちがいますが、私たちがロータリーのプログラムを通して、ネパールの、インドの、そして日本の、いや世界の子供たちに、夢と感動を与えているのではないかと、と思っています。

これは、オードリー・ヘップバーンですが、私たちは年をとるにつれて二つの手を持っていることに改めて気づきます。一つの手は自分自身の



● 夢 感動 希望

● 私たちは年をとるにつれて、二つの手を持っていることに、あらためて気づきます。



一つの手は ●
自分自身のために使い、
そして、もう一つの手は
他の人のために使うようにと、
神様から
いただいているのです。

ために使い、そしてもう一つの手はあなたの助けを必要とする人のために使うようにと、神様からいただいているのです。いうことを彼女は晩年、一人息子のショーンに言い残しています。そして彼女は実際、晩年亡くなる前までユニセフの親善大使としてアフリカの子供たちのためにボランティア活動をしていました。私はいつも思うんですけど、やはりロータリーって何も難しく考える必要ないし、もちろん歴史も哲学も大事でしょうけど、要は自分たちがちゃんと生きていくこと、自分の職業を大事にして生きていくこと、それが右手です。そして、左手をそれも自分のために、金儲けして何が悪いと開き直るのではなくて、だったらせっかくそうやって自分の職業でいただいたお金というものを、左手で人のために、自分たちの助けを必要としている人のために使っていくことがロータリーなんじゃないでしょうか。

忘年の友、●
三浦義弘さん逝く



まあ、ちょっと変なのが出てきましたけれども、この真ん中・私なんです。そして三味線をスコップ代わりにしてやってるのが、私がガバナーをやっていたときに地区幹事を務めてくれました三浦さんです。この二人でガバナーと地区幹事をやってまいりました。これは弘前クラブの忘年会でのかくし芸の一コマです。この三浦さんは私の大親友でありまして、彼は私より一回り上の方です。一緒によく飲んで、よくゴルフをして、インドへも一緒に行きました。おまえがガバナーやるんだったら、オレが地区幹事やる、オレ以外に誰がやるということでした。その代わり、オレはパソコンもできなし、英語もできないから、おまえ地区幹事の仕事も一緒にやれ、言われました。彼は何をしてくれたかという、オレはいつもおまえのそばにいて、おまえをいじめるバスターガバナーから守ってやる。まあその三浦さんなんです、その彼が私のガバナー年度の最後の頃、体調を崩されてね、大腸ガンだったのです。ただその後、手術も上手くいって、いったん元気になりました。しかしその後、肺への転移が見つかり、大学病院へ入院となりました。今から2年前の話になりますけども、私が翌年ネパール行くという12月ですね、病院に見舞いに行きました。彼はちゃんと服を着ていまして、さあ、これから二人で忘年会でやろうと、こういうわけです。がんの末期で入院している病人なのに。「おまえといつも毎年忘年会したろう」「でも、三浦さん、体もあれだし、風邪ひいてもまずいんじゃない」「いや、行こう」というわけで、



看護婦の詰め所をすり抜けまして近くの居酒屋に行きました。もちろん三浦さんは飲めるはずもないんですが、「おまえが二人分飲め」というわけです。オレの命も長くない、と彼は自分で言うわけですね。彼はたいへん偉いお坊さんだったんですけども、「オレはロータリーに入って本当に良かった・その世界しか知らなかったらどんなにかつまらない人生だったことかと思うけれども、ロータリーのおかげでいろんな人と出会えた。おまえとも出会えたし、おまえとはガバナーと地区幹事ということで、関場と三浦の名前は生涯にわたってロータリー史に残るんだ」というわけですね。「関場、おまえは本当にやんちゃで一本気の奴だけでも、おまえみたいな人間だってロータリーは必要としているんだから、もう少し人間丸くなって、人の言うことよく聞いて一生懸命力の限りやれ」と。そして、「関場、あの世で、向こうで、天国ロータリー・クラブつくって待っているから」とおっしゃってくれました。次の年の2月12日亡くなりました。私は信じているんですね、天国ロータリー・クラブを。

自分の家族のために、自分の従業員のために自分の仕事をしっかりとやりながら、それが右手の仕事ですが、なおかつ左手で少しでも世のため、人のために何か自分にできることをする、そうやって生きていくことがロータリーである、ロータリアンであろうと思うわけですね。そして、私たちもいつの日かこの世の命の終わる日が来るわけですが、そしてその次は天国ロータリー・クラブで、またロータリーを続けて行きたいですね。ロータリーというのはこの世だけじゃない・私たちが生きて、なおかつ死んでもロータリーの素晴らしい世界が待っていると信じているのです。三浦さんも待っていてくれると思っています。

ロータリーはそのように本当に自分へ、生きる力、エネルギー、そして多くの感動を与えてくれています。そういったことを世界の人に少しでも分かち合っていく、それこそが私たちロータリアンの役目だと思っています。



Rotary, ロータリー、この素晴らしい世界 What a Wonderful World!